訓蒙修身書

田村初太郎校閲
福田宇中編纂

三

72
388

東京

大日本教育會書籍館
一八函
一架
三號
一二册

K/10
18
3

明治十五年四月開雕

訓蒙修身書

積善館藏梓

東京圖書館藏

訓蒙修身書第三

緒言

前卷既ニ禮儀ノ數條ヲ掲舉スルヲ以テ本編更ニ謙遜ノ諸項ヲ列記セリ禮儀ト謙遜トハ素ヨリ並行シテ相戻ラモノナリ其品行ヲ作為シ其德性養成スルハ禮儀ト同一ノ看ヲナス

モ可ナルヘシ因テ初等科第二年前期
ニ相當スルモノトシテ此編ヲ設クル
所以ナリ

明治十四年十二月　　編者識

謙遜　高慢　尊大

訓蒙修身書第三

田村初太郎　校閲
林　和太郎　訂正
福田宇中　編纂

謙遜

○謙遜と　高慢の心なく　尊大の　おこなひなく　吾身を

智恵才徳

まくだり　人ふ先きだてげるを以ふ

○智恵才徳ある　人を　謙遜のみちを　よく守る　吾身をひけくして　言葉をたしむ

言葉

○人を　ふにわど　學問あると　も　ほこる　心なれば　誰も信

學問

誰信

無學

ぜるものるを　人は　信ぜられ　ざれど　無學の　人と同じ

礼讓

○人と　あらそふも　中れあ　くふるも　うる礼讓の　みだる　ふるふふ　礼讓を　失ふはざれ　ど　交る　つくるあれるべ

失

争　扱　怒激　闘　大計　誤　自貴　賤

○たとひ　人よりも　争ひを
このけるとも　禮讓を　もつて
ふきを　扱ふべし

○人の怒りに　激し　闘をふ
一生の　大計を　誤ること
なかれ

○人自ら　貴く　他人を　賤

服　却　侮　招　善　慎　世　得

しめざる　人これを　服せざる
のみならず　却つて　侮りを
招くことなり

○謙遜の德を　まもり　他人の
善をほめ　吾身を慎み　人ふさ
きだくべし　大ひに　世のほ
まれを得て　善者となるべし

昔 伊達政宗家臣 武勇譽大 将任 他後 藤孫兵衛 剛召抱 途逢

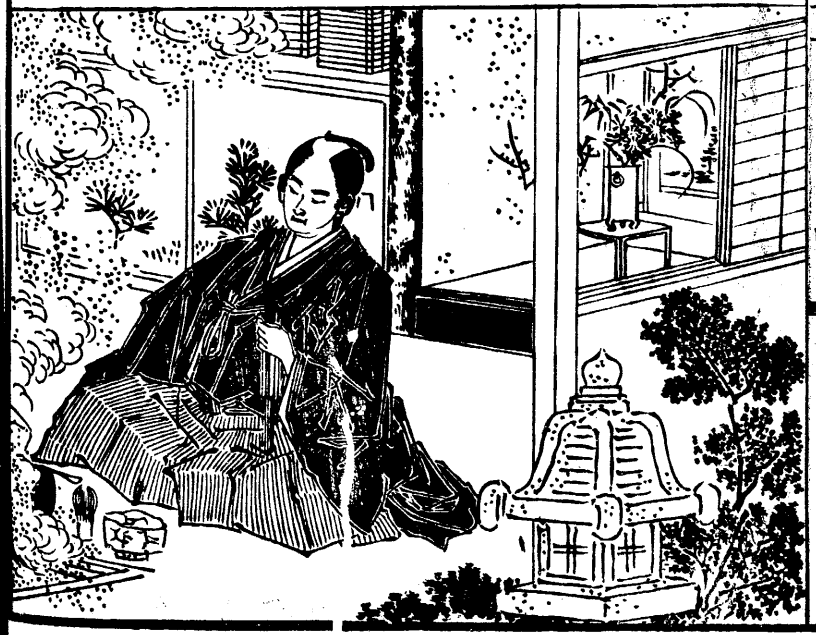
○昔―伊達政宗の家臣に　原田左馬助なるものあり　そこぬる武勇の譽をにて　大将の任をそなへ　政宗も　また他ふ　後藤孫兵衛といふ　剛なるをもを召―抱へたり　或日　孫兵衛途中にて　左馬助に逢ひ　禮を

荅礼 過去 御仇思 尤 心懸怒

ふせ―ふ　左馬助も　荅礼だふせば　過去りぬ　孫兵衛まを御ゝて　仇をかへさんと思ひ途中にて逢ふごとふ　無礼すれど　左馬助は　尤ぬ―て去る　政宗これを聞うれ　孫兵衛心懸よ―からざるを　怒ら

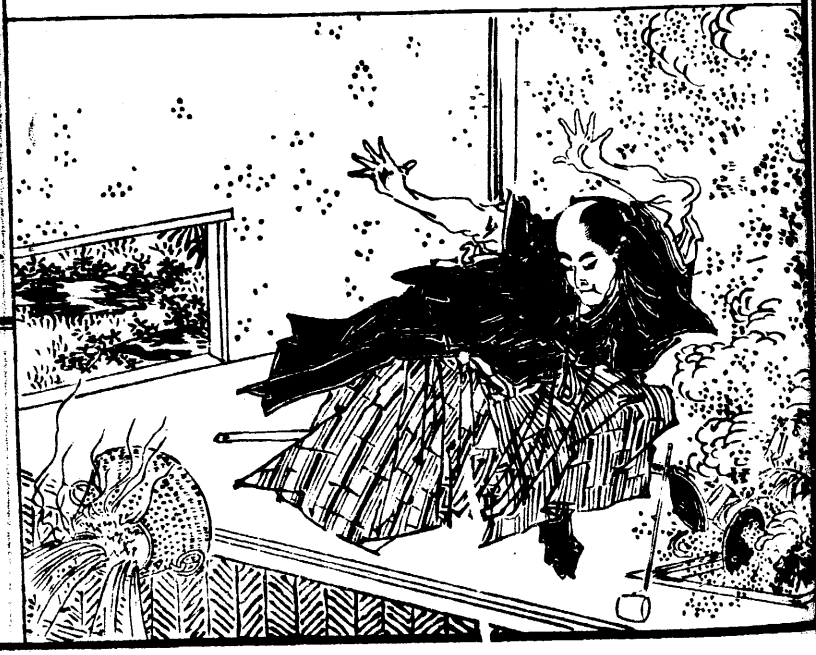
暇　謀　諫　臣不肖

き暇をたゞくんと　左馬助ふ　謀らる左馬助諫て曰く　臣不肖ながらも　大将の任をかた



衆人　佞諛多　真剛直士

ざけるふるを以て　衆人をみる　臣ふ佞諛すゆもの多　孫兵衛をたのらず　真ま剛直乃士



武功　待　初反　遇

あり　武功成　あるいはそれ　此者ならん　君とがむるれのれと是ようを　左馬助ハ　よく孫兵衛を待せしが　孫兵衛は　かくとも知らば　左馬助が　初めふ反してよく己を　遇すふをいふを　かくる　佞諂の者を置くを

恥辱　誅　面謁　迎　爐邉　延　情　述　湯　釜　投　短　刀　添　手

君家の恥辱なり　之を誅せんと　左馬助の家ないたり　面謁を求めしに　左馬助を　自ら迎へて　こなた成　爐邉ふ延しや　いなや　孫兵衛も　日頃憤怒の情を述べ　爐上の湯釜を取を　投つ　短刀ふ　手を添ゆる

を　左馬助を　從容として　姑
く待てや　其手を押へ止るにぞ
孫兵衛怒て　汝佞諛ものと
組付んとするを　左馬助　之を
押しふせ　聲を勵まして曰く　今
吾と汝と　ともに死せで　君家
の兩雄を　失なふべし　汝るん

ず　區々の私意をとつて　公道
を　あやまるかと　孫兵衛之を
聞き　悔ゐて曰く　吾誤てり
汝の早く　此ふ見るなるは　果
して　大將の器あるを知る　今
吾の無禮を　万謝するに所なし
と　其後　互ひに　水魚の　交

怒七情位自然性　制得正理遂害恥

はりをるせーとぞ

○怒を　七情は一て　位をる
自然の性ゐーて　必人情の　道
はべからげる　もはるれども
をーこを我　制することを　得
ず　正理の道と　出るはと　あ
れぞ　遂に　我身を害ー　恥を
はこすの　媒とれるぞー

能慎古語愚者胸中一朝争

○怒を　吾身を　ろこふはーむ
は　もはなれぞ　能慎すぞし
○古語ふ曰く　怒を　愚者の
胸中に　ねる
○一朝乃ぢうるて　身をわをれ
て　人と　争ひを　ふををれを

害　勸善教　慎　西人謗罪　犯　即節度失

人を　害するに　あらされど
必己の害をふ　勸善の教に
そむくゆへ　たゝ　慎むべし
○西人の謗に　人怒るべし　罪
を犯すふれと　罪を犯せは
即ち　其節度を　失なふにふ
もれるれば　能く慎むべし

暴悪　天理人道　戻　吾身価減　自負　温和　尊敬

○暴怒も　天理人道ふ　戻るれ
はふいだしきもれふり
○吾身の價を　減ぜふもれを
自負はるるを　大ひなるものは
ふし
○温和なれ　うたちは　人を
て　尊敬の　思ひを　れこはし

温和 言葉 信仰 崩 西諺 愛敬

め　温和なる言葉を　人をして
信仰の心を　崩さしむ　故ふ
西諺にいへ　温和は　愛敬の母
なりといへり
○我人を　敬すれば　人もまた
われを　敬ふべし
○たとひ　人は　すぐれたる才

尊敬 才能 暇忙 贈

能なりとも　人ふ尊敬せられず
まづ信仰せらるべきなり　とかを
才能なるに　異ならば
○我は　暇あるとも　忙しき人
の家にゆき　ながばなしを
なすべからず
○人に　贈りものを　するにも

軽微最善　猶死　英吉利理學

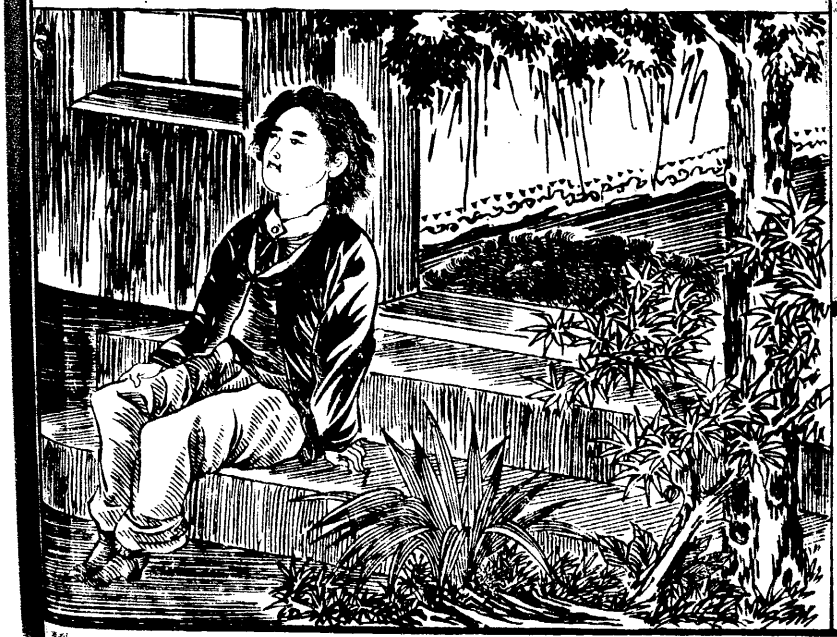
礼を　失ふはざれば　たとえ
軽微の物と　いへども　最善の
おくれもなるべ
○西諺に曰く　信をうしなふも
なほ　世にあるべ　猶死したる
ものとおなじ
○英吉利の理學者　アイザック　ニウ

多項種々　細工物作妙　得近所　麥粉磨風車仕　動機　最上出来

トンは　幼なき頃より　種々の細
工物を　作ることに妙を得たり
近所の　麥の粉を磨る　風車
を見て　そのしかけを　せんさ
くし　其動機を　よく考へて
一川の　風車を　こしらへに
最上の　出來なり　また友人

古箱　水時　計　追〻歳　長大　學校

ある　古き箱
をもらひ　こ
れをて　水時
計を　作るる
り　追〻　歳
の長ぜるを及
び　大學校に



欠

十二十三頁

學進
知見
觀足

學び進むべき知見ふ〻べるで固より觀るる足らざるものと心得り

着實
婢
奉公
怒

○イタリー國ゼノワの學者アボフルトを着實の人なるを此家ふ一人の婢ありて三十年の久しき奉公せしに未だ主人の怒

怒欲金　興　請諾寢床　次第前夜　常變婢

ずふあるべ　人あるて　先生の
怒りを　見んと欲し　婢ふ金を
與へ　主人をいのゝしめんと我
請ふ　婢諾して　主人の　寢床
を　はべざるに　先生い　事
の次第と知らば　前夜の床は
常ふ變ずるとのふり　婢おどろ

色忘　荅　怒　深思　指支

く色ふく　こゝを我忘れずるとを荅
ふ　かくはばとすること　三
夜なれども　先生更ふ　怒る色
ふく　婢を呼び　汝毎夜　床を
のべざるは　深く思ふ所あり
て　志のはなるん　されば床を
はべずとん　指支ありと

次第罪謝

婢を心中ふ　れそれを生じ
遂ふそれ事の次第をのべ　罪を
謝せしむ

言語

言易

○言ふこと　易く　行ふこと
をかたし　西諺

財布利

○口と財布は　とづるふ利あり

憂

○言ふかたれで　憂をまねく
揚子雲

拙行巧

○拙く行ふを　巧みよりふりは
さる
同上

談話屢長談

○人と談話をるは　屢をづ長
かるべからず　長談を人をうま

同上

注意　聽　自益　信實　詐　自負　稱賛

ゑめ且人ゑ　ゑ〜はる

○小人と談話をといへども　注意して　こゝを聽く　ときを自ら益を得ることなからん

○言ふところ　信實ふして　詐ならざるも　自負の氣をもつて語れば　それ稱賛を　得るもの

稀　座中　撰耳　語　高談　窮　悪習　傍大　猫　戲　烟管

稀ふわり

○座中にて　一人を撰ミ　耳語し　またを高談して　其人を窮せしむるあるを　是等の悪習ハふそべふ〜び

○人の談話を聞きて　傍ら大猫と　戲を　烟管ゑそてなそび

空仰見　習慎　笞怨　侮辱

空を仰き見る等を　皆いやしき
習ひれを　能く慎むべし
○笞うたまくる　怨を　きゆる
ことなるべきも　侮を辱しめら
れし怨みは　忘るゝことなし
○他人の談話中に　己が談話を
仕のけ　又人の談話を　止めて

悪風　英人幼少　西印度　帰國後　得意　夏半

己が談話を　聞うしめやとなる
を　悪風なるを
○或る英人　幼少の時分を　學
問せしことれく　一度西印度ふ
行きて　帰國の後　常ふ得意
の色を　あらはし居たり　或る
夏は半ばの頃　人乃はふしに

此節日の出を
朝第四時の
頃なり　早き
ことれ〳〵ずや
と叫ぶを　彼
男の曰く　朝
第四時の日乃

出を　おど〳〵
くに足らび
西印度のシヤ
メイカは　朝第
二時と三時の
間ふ　日を既
に昇まを　余

彼地　事實　赤道　割合　遥

先年　彼地ふく　これを　見たるとこと　是い事實ふ於てを　あるべきならばふことなを　赤道より北の方の地ふては　北へよりほど　日ハ出を　速くなるべき割合ふあり　ちうほふ　西印度を英吉利よりを　遥ふ南の方にあるゆへ　日乃出を　遅くふるに

遅　無學者　物知　顔

無學ハ者ゞ　物知を顔して　人の笑をまねくこと　おのれ

見原益軒　嘗京師　歸　路海上同船　數人

○見原益軒　嘗て京師よりを　歸らんと　路を海上ふ取まり　同船をるもの　數人なるが中に

書生　傲然

一人の　書生あり　傲然として

聲高 経義講沈黙 傍 聽 船岸 達姓名 愧 陳逃去

聲高く経義を講ず　傍ら人なきがごとし　益軒沈黙して之を聽居たる様を　字を知らざる者の如し　既にして　船岸は達し　各其姓名を告ぐ　書生その益軒たるを知り　大ひに愧ぢ姓名をも陳せずして逃去りぬ

松田海石圭 峰

武部芳峰画

訓蒙脩身書第三終

明治十五年三月十七日版權免許
同　四月　出版發兌

定價九錢五厘

編輯兼出版　德島縣士族　福田宇中
大阪府東區安土町四丁目拾壹番地寄留

製本發賣所　大阪府平民　華井卯助
府下東區安土町四丁目拾壹番地

訓蒙修身書

田村初太郎校閲
福田宇中編纂

四

大日本教育會書籍館
一八函
一架
三號
一二冊

館
四十函
一架
號